

天台四種釈の成立に関する基礎的考察

山口 弘 江

一、はじめに

ここにいう天台四種釈とは、天台大師智顛（五三八—五九七）の鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（以下、『法華経』）の講説録である『妙法蓮華経文句』（以下、『法華文句』）に用いられる四種の解釈方法の総称である。因縁釈・約教釈・本迹釈・観心釈よりなるこの四種釈は、『法華文句』と同様に天台三大部に数えられる『妙法蓮華経玄義』（以下、『法華玄義』）の五重玄義や『摩訶止観』の五略十広とともに、それぞれの文献の骨子として、天台学の初学において語られる。そして、この四種釈による『法華経』解釈が天台教学を天台教学ならしめたともいうべく、その意義が認められてきた。しかしこのような理解は、四種釈という完成型をそのままに捉え、もっぱらその有用性に目を向けることによってなされてきたものであり、その成立背景については長らく顧慮さ

れてこなかったかのごとくである。そのような状況もあり、この四種釈に対する客観的な検討への試みがなされるようになる¹⁾と、後に詳述するように近年少なからざる議論が展開するに至った。

以上のような動向をふまえ筆者は、天台四種釈がいかなる構想のもとに成立したか、その解明を試みている。その一環として、問題の焦点が奈辺に存するのかを闡明することを目的とし、先行する諸研究における議論を整理することにより、本稿を基礎的考察として位置づけるものである。

二、「四種釈」の呼称について

近年においてはこの四種釈が議論される際、その主題としてほぼ例外なく「四種釈」という語が用いられる²⁾。そのような流れを踏襲し、本稿もこの語を採用した。しかし、その典拠とされる『法華文句』には、因縁釈・約教釈・本迹釈・観

心積の総称が「四種積」という語のままに記されるわけではない。そして、過去の天台教学史において必ずしもこの呼称が固定化して用いられていたわけではなかったことは、近代以降の用例を遡っただけでも明らかである。この点は、これまであまり注意が払われてこなかったようであるが、諸研究における各説の分析に入る前に、先入観を極力排除して成立の背景を探ろうとする意図から、まずはこの「四種積」という総称の由来を確認しておきたい。

まず、本稿の論題にも掲げる「四種積」という名称は、実は『法華文句』の中では一ヶ所にその語が見られるものの³、その内容は、ここで問題とする四種類⁴の解釈を指したものである。はな。

そこで改めて『法華文句』の原文で、考察の主題である四種積がどのように紹介されているかを確認しておきたい。

今帖文為四。一列数、二所以、三引証、四示相。列数者、一因縁、二約教、三本迹、四観心。始從如是終于而退、皆以四意消文。而今略書、或三二一。貴在得意、不煩筆墨。

（大正蔵三四卷二頁上）

ここでは、まず因縁・約教・本迹・観心という四種積の各呼称が挙げられる。そして、傍線部に「四意を以て文を消す」とあるように、これらを四つの意により文を解釈するという。この「四意消文」という表現は、この引用文の冒頭で挙げら

れる「四示相」を述べ終え、次のように締めくくられる中にも見られる。

從如是去至作礼而退已還、悉作四意消文。

（大正蔵三四卷三頁上）

その他、『法華文句』の注釈書である荊溪湛然（七一―七八二）撰『法華文句記』にも用例は見られない。管見の限り、中国の文献において因縁積より始まる四種積を「四種積」の三字を用いて称する例は、皆無に等しい。⁴一方、日本の文献では「四種積」とする例がいくつか確認できたが、やはり固有名詞化されるには至っていないように思われる。

そこで、実際にどのように呼称されてきたのか、各種の辞書における解説を確認してみたところ、それらは概ね「四積」として称しており、「四大積例」「四種消積」「四種銷積」などとも異称されると解説する。このような工具書類における傾向は、四種類の解釈法は天台のみならず三論や真言で用いられるものもあるため、これらと併記する都合もあつてのことと推測される。しかし、ここでも注意を要するのは、異称として挙げられる「四大積例」などの表現も、実際に『法華文句』では用いられていないという点である。

天台教学の概説においては、この四種積について言及されることが少なくないが、比較的早く「四種積」という語を用いたのは、関口真大『天台四教儀』に付録された天台典籍の

解題における『法華文句』の解説のようである⁷⁾。なお、今日「四種釈」という用語は、特に日本の学界においては広く用いられ周知されるに至っているが、海外ではそれほど浸透していないことも留意すべきであろう⁸⁾。

三、近年の研究動向とその特徴

ここではまず、問題の所在を明らかにするために、これまで四種釈について論じられた先行研究の諸説を整理していくこととしたい。主要なものを発表された順を追って挙げると、関口真大（一九三五年・一九七三年⁹⁾、佐々木憲徳（一九五一年¹⁰⁾、福田堯顥（一九五四年¹¹⁾、佐藤哲英（一九六一年¹²⁾、安藤俊雄（一九六八年¹³⁾、浅井円道（一九八〇年¹⁴⁾、平井俊榮（一九八五年¹⁵⁾、多田孝文（一九八五・一九八六年¹⁶⁾、菅野博史（二〇〇五年¹⁷⁾、瀧英寛（二〇〇七年¹⁸⁾、花野充道（二〇一一年¹⁹⁾、藤井教公（二〇一三年²⁰⁾）といった諸氏の論攷が確認された。

以上の順序は、初出の有無などにより必ずしも議論の前後関係を正確に反映したものではないかもしれないが、概観すると四種釈に関するこれらの諸論が示す研究動向には、ある時期を契機として変化が見られる。その転換点に位置づけられるのが、一九八五年の平井氏の論攷である。

天台四種釈の成立に関する基礎的考察（山口）

周知のごとく平井氏は、三論研究に立脚しつつ、天台文献に対して批判的な視座から数々の問題提起を行っている。四種釈に関する研究もその一環に位置づけられるものであり、その中では吉蔵の用いる四種釈義なるものが、筆録者の章安灌頂（五六一〜六三二）によって換骨奪胎されて『法華文句』に用いられたのが天台の四種釈であると指摘したのである。その後、四種釈については、断続的ではありながら複数の研究者によって論題に揭げて考察されるようになる。

また視点を変えれば、管見の限り、平井氏によって批判的な考察がなされる以前に、『法華文句』の四種釈を主題とする論文は見られない。このような傾向は、以前の天台学研究において、四種釈は仔細に検討を加えるまでもなく自明の理のごとくに理解されており、なぜそのような四種が成立したのかを根底から探ろうという意識が希薄であったことを暗に示したのと言えよう。

その証左を少しく見ていきたい。例えば、関口氏は四種のそれぞれを述べた後に、「この四種釈こそは即ちそのまま我等の經典説誦乃至宗学研究、否、あらゆる学問研究の最も正しき方法を示されたものなのである²¹⁾と総括するが、この一文からは四種釈を天台宗学のみならず、仏教学全般においても最も正しい解釈学として自負する意識が十分に窺われる。また、安藤氏も同様に、「天台教学の近代的人格がその合理

的思想に由来することは明らかであるが、この合理性を生み出したものは、大師智顛の四種釈に見られるような完全な解釈法である。……光宅の煩瑣な法華義記と対照するとき、智顛の法華文句の内容がいかに組織的であり、且ついかに豊富な内容をもっているかが明瞭となるであろう。そしてこれは完全且つ合理的な四種釈から由来するものである」と記すように、四種釈に対して最大級の讃辭を惜しまない。また、天台文献に対し網羅的に基礎研究を加え、それぞれの文献の成立事情を数多く明らかにした佐藤氏も「灌頂の手がどれほど加えられたからといっても、法華文句に於ける經文の典型的解釈法たる因縁・約教・本迹・觀心の四種釈義まで灌頂の加筆と見ることは許されず、明らかに智顛自身の独創的な經典解釈といわねばなるまい」などの表現に顕著なように、智顛の独創なる解釈法であることを強調し、成立の過程についての疑義を微塵も感ぜさせない。

このように、かつて四種釈が論じられるのは、前述の辞典などの項目を除くと、天台学の概説書などで『法華文句』を説明する中で解釈法の独自性が解説される場合にほぼ限られていた。それに対し、平井説以後、多田氏により反論がいち早く提出され、その後も断続的ではあるが四種釈を主題に掲げる論文が発表されるに至ったのである。その結果、平井説に対しては、今日懐疑的な見解が大勢を占めることとなり、

また結論から言えば筆者も同様に、天台の四種釈の成立は吉藏文献に見られる四種釈義に直接的な影響を受けたものではないとの見解に立つ。しかしながら、これらの論攷は平井説に喚起されたからこそ着手されたのであり、それにより四種釈についての研究は新たな展開をみた。このような進展を促したという点において、その学術的意義は極めて大きなものであったと評価されよう。

以上のような研究動向を鑑みるに、平井説の発表を分岐点としてその以前と以後の研究では、四種釈を論ずる際の姿勢にいくらかの変化が見られる。そこで、次節ではそれらの変化に留意しつつ、現代の研究において四種釈に關説する代表的な論攷、及びそれらの中で論及されるもののうち重要な指摘と思われる部分を整理し、問題点を明示していくこととする。²³⁾

四、諸研究よりみる問題の所在

そもそも四種釈については、先に引用した『法華文句』の「帖文爲四（文を帖するに四と爲す）」に始まる一段の列数（四種の名称の列挙）・所以（四種釈の由来）・引証（四種釈の典拠となる『法華經』の經文）・示相（それぞれの特徴の提示）の四項目の中に解説がなされている。このように、実際の經

文解釈において適用される前に、四種釈そのものの意義付けについて紙数が割かれていることは、これが『法華経』⁽²⁾解釈の基盤であることを示す最も顕著な根拠に他ならない。したがって、四種釈がいかなるものかについては、その中で説かれる範囲で理解すればよいはずである。

しかしながら複雑なのは、それらの中で説示されているものが、実際の経文解釈の方法を直截的に解説したものでないため、四種釈の個々の釈の性質を見極めるには、経文解釈の実例を分析し判断するより他ないところにある。読者の関心や目的が異なれば、内容分析の結果も異なることは世の常である。そして事実、数多くの碩学によつて語られる四種釈それぞれに対する認識にもまた、若干の相違が生じているように思われる。

そこで、以下には諸研究において四種釈がどのように理解されてきたかを、四つの観点から検討してゆきたい。

(一) 四種釈の基本理解について

四種釈のそれぞれがどのような性格のものであるかについての解説は、多くの天台学の概説書に散見される。多田氏は『天台大師全集 法華文句』の中で、会本に先だつて四種釈を詳説する一章を加えるが、その冒頭には従来からの基本理解として、次のように四種釈を紹介する。

天台四種釈の成立に関する基礎的考察（山口）

因縁釈は、『法華経』の事釈、即ち現実の如く四悉檀を以つて釈し、約教釈は、それを四教にかけ円教の立場を明確にし、本迹釈は、法華の本迹二門の円教中本門の円教を顕揚し、観心釈は、前の三釈を自己当体の心に照らす方法としての観法を示しており、因縁・約教・本迹の三は、教理的解釈であり、観心の一は、実践的解釈であると従来より一般的に説明解釈されている。⁽²⁾

この説は、天台学の概説書として名高い福田堯穎『天台学概論』の解釈をほぼ忠実に踏襲したものであることは両書を対照すれば明らかであるが、「従来より」「一般的に」という点を、それより以前の関口・佐々木・佐藤・安藤・浅井といった諸氏の解説より確認していききたい。整理の都合上、まずは簡にして要を得た佐藤説を元に、その特色を見ていきたい。

第一の因縁釈とは、説者たる仏陀と聴者たる衆生の因縁和合、感応道交の面から経文を見てゆくので、因縁が和合して説法がなされると、必ず四悉檀の益があるとして、四悉檀にかけて文義を釈してゆくのである。第二の約教釈とは、経文をば四教五味の教相に約して解釈するので、頓・漸・秘密・不定の化儀四教、藏・通・別・円の化法四教、更に乳・酪・生酥・熟酥・醍醐の五味にかけて偏円大小の教格を明らかにするのである。第三の本迹釈とは、一々の経文をば迹門と本門との両面より解釈するの

である。以上の三積が經文の理論的な解釈であるのに対し、第四の觀心積は、經文の一々をば己心の上に觀照味読する実践的な解釈である。²⁷⁾

第一の因縁積より見ていきたい。佐藤氏は因縁が感応の義であること、また四悉檀による解釈であるという二点により因縁積が説明される。関口・浅井の両氏も同様にこの二点を中心とし解説する。

このうち感応については、「帖文為四」の第二「所以」の冒頭に「因縁亦名感応（因縁は亦た感応と名づく）」とあることを受けたものであることは容易に首肯されるが、四悉檀については「帖文為四」の中に直接的な言及は見られないため、この限りにおいては判然としない。したがって、実際の經文解釈において因縁積において四悉檀にかけた解釈が主となることを踏まえてのものと推測される。その点もあり、佐々木氏は感応に言及するものの、四悉檀には触れていない。

また福田・安藤の両氏は感応・四悉檀のいずれにも直接言及しない。福田は前述の多田の引用文のとおり「事釈であつて、現実の如くに釈する」というが、その具体例として、教主釈尊を、淨飯王の太子として生まれ十九歳で出家し云々と解釈するような方法だとする。ここで挙げられる例は『法華文句』に実際に見られるものではないが、約教釈に先立つ部分で四悉檀との対応を特に示さず故事などが綴られることは

少なくない。²⁸⁾ その点を重視した解説と言えよう。また、安藤氏は「教法の興る由来を釈すこと」といい、王舎城の解釈で『大智度論』の故事が引かれることを紹介する。このように、因縁積が直ちに四悉檀による解釈とはならない点は留意すべきであろう。

次に第二の約教釈については、実際の積では藏・通・別・円の化法四教にかけた解釈が主となるが、その目的は『法華經』の円教の解釈に置かれることを福田・浅井の両氏は強調する。この点に関連して、菅野氏は円教しか説かれぬ『法華經』の解釈において、四教の一々から解釈する理由を、円教の立場を明確に示すためと、約教釈という解釈方法の存在を知らせるためには他の三教との比較を踏まえる必要性があったからだと推定する。²⁹⁾

福田氏と同様に安藤氏も化法四教を特色とするが、佐々木氏が「教相理論のうへより解説してゆくもの」とより広く捉えるように、佐藤氏が化法四教に加えて化儀四教や五味を挙げる他、関口氏は五味八教・三益・三種教相など、浅井氏も化法四教と五味を挙げる。このように、約教釈とは化法四教に限られないことが注意されよう。また、浅井・多田の両氏は、因縁積が利益を受ける衆生の側から見た解釈であるのに対し、約教釈は仏の側から見た解釈だとし、両積の対応関係を描く。³⁰⁾

第三の本迹釈は、正しく『法華経』の本迹思想に基づくものであることは想像に難くないが、佐藤氏が「迹門と本門の両面」と単なる比較と捉えられるような説明のみであるのに対し、福田・関口・浅井の諸氏は、因縁・約教の前二釈において迹門的の解釈がなされるので、本迹釈の主眼は本門的な解釈にあるとより踏み込んでいゝる。また、浅井氏は本迹迹劣の日蓮教学を意識して、『法華文句』においては人名以外の解釈では体用本迹が多いとの指摘も加える。

第四の観心釈については、多田氏の参照する福田氏、または佐藤氏の解説にあるように、前三釈の教理的解釈に対して、己心の上に実践的な解釈を展開するものであるとの定義はほぼ異論のないところであり、多くがこの点に天台釈の特色を見出ししている。また、福田氏は「之れ（観法）に託事観、附法観、従行観がある」と湛然『止観義例』所説に由来する三種止観に關説するが、これについては別のところで従行観が『摩訶止観』、附法観が『法華玄義』、託事観が『法華文句』の所説に対応することが説明されるように、浅井氏も王舎城に対する解釈などは託事観で『摩訶止観』の約行観（＝従行観）とは異なることを強調する。また、佐藤氏は三大部内での引用關係に着目し、『法華文句』には「事々物々に托しての觀法が述べられて」いるとしつつ、観心釈の詳説を『摩訶止観』に譲る例として二ヶ所を列挙するが、『法華文句』における

観心釈の性質、および『摩訶止観』との関連性を示すものとして重要な指摘と言えよう。

(二) 四種釈の構成について

前項では四種釈それぞれに対する基本的な理解を先行研究に求めてきたが、その中のいくつかで言及されていたように、四種釈それぞれの關係については次のような図式で理解されることが分かる。



さて、これら四種の解釈法の間には優劣や主従などはあるのであろうか。これについて、例えば関口氏は『法華文句』は「因縁釈に比重がおかれざるを得ない」とする。これは約教釈・本迹釈の一部を教理的体系づけたものが『法華玄義』であり、観心釈の一部を一括して整頓したのが『摩訶止観』であるというように、三大部の中の配当を意識した上での理解に基づいている。また、平井氏は智雲撰『妙経文句私志記』を受けて因縁釈を最も重んじていると見る。

一方、安藤氏は観心釈が最も重要だとするが、これは中国

仏教思想史の上に智顛の経解釈法の独自性を位置づけた横超慧日氏の論致に、講経重視の南朝の釈風に衝撃を与えたであろう観心釈に意義を見出す論調と、軌を一にするものと言えよう。⁴⁰

また、平井氏が同じく四種であることより吉藏の四種釈義からの影響を指摘したことを受けて、多田氏は各種の四の法数を挙げて反証を試みている。ただし、これは先に挙げたような四種釈の立体的な構造をふまえて再検討する必要があるう。

もう一点注目したいのは、四種釈と五重玄義の関係である。これについて、安藤氏は「四釈は経文解釈の方法であるとともに、同時にまた智顛をしてこの五重玄義を把握せしめた研究方法であった」と両者が密接な関係にあつて成立したことを示唆するが、より具体的には、瀧氏によって『法華玄義』の釈名のうち「妙法」解釈に展開される迹門十妙と本門十妙を約釈と本迹釈との対応に関係するものであることが指摘されている。⁴¹なお、これに関して、筆者も『維摩経玄疏』の釈名において三観義と四教義が中心となつて展開されることと四種釈の構成とは関連が見られると推定する。この点については、次稿に期したい。

(三) 四種釈の適用について

四種釈が一貫して経文すべてにわたつて用いられるわけではないことは、先に引用した「帖文為四」の一番目に挙げられる「列数」の終わりに、「而今略書、或三二一。貴在得意、不煩筆墨。」（しかしながら、ここでは省略して書くので、場合によっては三種や二種、一種のみとなることもある。大事な意味を取ることにあるので、あれこれと記さないのだ）⁴²として、意味を明らかにすることを優先して省略することが明言されるとおりである。

この点について、浅井氏は湛然が『文句記』において欠けた釈を補っている点に着目し、省略がみられたとしても四種釈が『法華文句』において明確に存在することを強調する。⁴³

一方、平井氏はこのような解釈の適用を「隨宜的、諮意的」と批判的に評する。ただし、このようは表現が用いられる背景には、吉藏の四種釈義が教理体系的により優れているとする平井氏の価値基準があることに注意しなければならぬ。これに対し、菅野氏は四種釈の適用法が十分でないとの見解を示した上で、「そもそも、中国の経疏のなかで、一貫した解釈方法を經典全体に満遍なく適用した例を筆者は知らない」といい、注釈書一般の事象であることを指摘する。更に瀧氏は「ある特定の記述部分に対して集中的に加えられて

いること自体に、思想的な意図を読み取るべきであろう」⁽⁴⁵⁾と四種釈に省略が見られることに積極的な意義を見出そうとする。

このように、解釈対象となる経文の内容に応じて、四種の解釈に濃淡が生じていることは事実である。『望月仏教大辞典』の「四釈」の解説には、それぞれが使われる場面により傾向があることを「仏及び弟子等の行事等には多く因縁釈、如是我聞等の教義には多く約教釈、仏又は弟子等の身上に関しては多く本迹釈、王舎城等の地名及び一万八千等の名数に關しては多く觀心釈を用ひたり」と指摘する。これらのことから、四種釈は均一に施されているのではなく、対象となる文言により四種の適用の比重が異なると見られている。

また、瀧氏は先ほどの引用部に続いて、『法華經』序品に登場する声聞・菩薩・雜衆といった衆生のそれぞれの解釈に對しては四種釈が詳細であるとし、『法華文句』では「説法自体よりも、むしろその説法対象である衆生の問題に重点が置かれるかたちで検討されているといつてよい」として、『法華文句』が向ける解釈の関心事は衆生にあると読み込む点は、興味深い指摘と言えよう。

(四) 他文献との関連について

本稿でも繰り返し述べたように、四種釈は『法華文句』の

天台四種釈の成立に関する基礎的考察(山口)

所説である。ところが、他の天台文献にも類似の説が見られることは、諸研究において夙に指摘がなされるところのものでもある。浅井氏は「他の智顛の經疏類には、このような明確な四種釈はない」とした上で、『金光明經文句』『請觀音經疏』『仁王經疏』等には四種釈に相当する釈は見られるが、それは読者の判断に依るのであって、文上に明瞭に表わされてはいない」とする一方、『維摩經文疏』に至ると總釈・別釈・觀心釈の三釈が施される」といい、「かくて結局、四種釈は本書だけの特徴ということになる」と結論付ける。⁽⁴⁶⁾

ここで挙げられる、『金光明經文句』『請觀音經疏』『仁王經疏』及び『維摩經文疏』に見られる相当する釈については、すでに佐藤氏が検討を加え、前三文献については灌頂及び後世の人物により成立した可能性が指摘されるものであるため、その中の釈も後世の影響と見なされ、四種釈の成立という観点から関心が寄せられることはない。⁽⁴⁷⁾一方、『維摩經文疏』については、智顛の最晩年に成立した著作であり、灌頂により智顛の示寂後も修治が加えられた『法華文句』よりも智顛の親撰に相応しいという位置付けがなされていることから、『法華文句』の四種釈を検討する上でも、非常に重視されることとなる。

以後には、菅野氏が平井氏の説の妥当性を検討する際にも、主要な論拠として取り上げられた。その所説を少しく紹介し

ておきたい。

まず浅井・佐藤の両氏が指摘する『維摩經文疏』に見られる三種積について、菅野氏は『維摩經』仏国品第一冒頭の經文である「如是」「我聞」「一時」「仏在」「毘耶離」「菴羅樹園」の六語に対する解釈の中からその具体的な用例を抽出し、「総明」「総釈」「総解」「約事翻釈」などと称される第一の積の他に約教積、觀心積の名称が見られるとする。その上で、第一の積に当たる部分がそれぞれ因縁積に相当するのからという点について、『維摩經文疏』には『法華文句』の「因縁積」という名称も出ないし、因縁積の内容である四悉檀による解釈も見られないことを確認しておきたい⁽³⁰⁾と前置きした上で、『法華文句』に見られる「事釈」「事解」という用語が因縁積に共通することから、『維摩經文疏』の「約事」という表現はこれらに連なるものであると見なす。また、この三種のうち第一と第二が「総釈」と「別釈」と規定されていることに留意する。次いで、第二の約教積に代わって「対法門」という積が用いられる例が二箇所あり、それらは本迹積との関連が見られることを指摘する⁽³¹⁾。

このように佐藤・浅井・菅野の三氏は『法華文句』に先行する形で成立した『維摩經文疏』の三種積の存在に着目し、それと『法華文句』の四種積との対応を論ずるが、対応のさせ方については相違がみられる。この点を明らかにするため、

これら『維摩經文疏』に着目する三氏が斉しく注目する『維摩經文疏』卷三と『法華文句』卷一上の次の一段より見ていきたい。

若講法華經、必須約本迹明義、解釈同聞歎德。今經既未
発本顕迹、但釈因縁事解觀行而已。

（中統藏二七冊四四四丁右下）

若釈他經、但用三意。為未発本顕迹故。当知今經三釈与
他同、一釈与彼異。

（大正藏三四卷三頁下）

前者の『維摩經文疏』、後者の『法華文句』の両文は、本迹積が『法華經』にのみ用いられることを述べることから、諸研究において注目されるのであるが、ここではまず、前者の引用文の中にある「因縁事解觀行」の六文字をどう区切りに解釈の相違が見られることに注意したい。佐藤氏は「因縁・事解・觀行」と点を加えるが、『維摩經文疏』に因縁積・約教積・觀心積の三積が見られるとしたのは、ここで三分するような理解に基づくようである。他方、菅野氏は「因縁事解」「觀行」に分けて考える。また、菅野氏が『維摩經文疏』の総釈を『法華文句』の因縁積を直ちに結びつけることに慎重なことは、先に触れたとおりである。

なお、この引用文の中でもう一点注意を要するのは、両書ともに「発本顕迹」の文言を用いていることである。これは一般に「発迹顕本」として知られるものが、偶然にも両書に

おいて誤って記されたとも考えられているが、その是非については改めて慎重に検討されるべきであろう。

今はそれらの点を保留し、再び記述の主意を見てゆくと、この両文より本迹釈が『法華経』にのみ用いられることが、『維摩経文疏』『法華文句』の両書の撰述時に共通して念頭にあったことが知られる。これにより、本迹釈の構想は、菅野氏の表現を借りれば「用いないという形で逆に言及」されたことにより、確実にあつたものと考えることができよう。

しかしながらそうなると、『維摩経文疏』『法華文句』の両書に軌を一にして『法華経』と他経とは本迹釈の扱いが異なると言及されることと、菅野氏が指摘する『維摩経文疏』の「対法門」の項目の中に本迹釈と共通する解釈が見られたこととは、いわば矛盾が生じることとなる。この点について、花野氏は、『維摩経文疏』に説かれる本迹義には、『法華玄義』の六重本迹のうちの已今本迹が欠けることに着目し、『法華文句』にいう本迹釈とは正しくこの已今本迹に基づくことを指摘し、『維摩経文疏』のそれは体用・権実の本迹だとして両者を峻別する。また、『法華文句』の四種釈は『維摩経文疏』の三種釈から展開したものではない、との同氏の結論的主張を導いている。

また、先に菅野氏が『維摩経文疏』には「因縁釈」という名称もなく、四悉檀による解釈も見られないことを強調した

点に関連して、藤井氏は『維摩経文疏』の中から四悉檀に関連付けた解釈が多数見られることから、これらを因縁釈と見做しうる可能性を指摘する。ただし、この見解に対しては、菅野氏によって『法華文句』において因縁釈として用いられる四悉檀解釈と、『維摩経文疏』に散見される四悉檀による解釈とは性質が異なるとして反証が試みられている。

このように、いわば解釈が揺れる因縁釈と本迹釈については、そもそもの『法華文句』における定義に立ち返って、これらを他の経疏に適用することが可能かどうかの判断が必要となることが知られよう。

五、おわりに―天台四種釈成立の解明に向けて―

これまでに挙げた諸文献における解説及び考察において散説された問題点を整理すると、四種釈の成立およびその思想的意義を検討する際の論点が浮上しよう。本稿の結びとして、天台四種釈の成立問題を解明するためのいくつかの視座を提示することとしたい。

第一に、四種釈のそれぞれがどのような意図のもとにおかれたのか、その原意を探る必要性である。このことは、菅野氏と藤井氏が『維摩経文疏』に見られる四悉檀の解釈を因縁釈として認めるか否かの議論に端的に表れている。このよう

な見解の相違が見られた背景には、やはり四種の各積、特に因縁積の定義づけが曖昧であることが影響していると言えよう。『法華文句』巻一に四種積の由来を述べた一段があるにもかかわらず、実際の解釈での適用にも幅があることから、論者によって理解される定義にも自ずと隔たりが生じているのであり、この点は因縁積のみならず、四種のすべてにわたって再検討する必要がある。

第二に、『法華文句』単独で考えることの限界である。『法華文句』は智顛の『法華経』講説の内容に基づくものではなく、周知のごとく今日我々が目にするテキストは、灌頂による筆録、玄朗・湛然による修治を経ており、すべてが智顛の言葉だとするには無理がある。よって、四種積の成立を『法華文句』そのものの成立の過程のどの段階に認めるかが大きな問題となるが、この点については二方向により模索してゆく必要がある。その一は、複数の先学が『維摩経文疏』の三種積との対応関係に着目するように、他の天台経疏の積との比較からより精査することである。文献成立の問題から『維摩経文疏』以外の経疏については、これまでは考察の対象外とされているが、經典の冒頭は文言が共通することから、それぞれの経において異なる解釈、また共通する解釈が四種積とどのように関わるのかを精査する余地はあろう。その二は、『法華玄義』や『維摩経玄疏』などの玄談との有

機的な関連性に注意を払うことである。すでに、一部の研究者により注意が喚起されている問題ではあるが、その方向性は確実に四種積が成立した思想的背景に直結していくものと考ええる。

これらの問題点が明らかにされた上で、最終的には天台教学の範囲のみで考察するのではなく、中国仏教思想史の中でも一度この四種積の意義を検討するということが求められよう。ただし、ここで提起するのは、創案の先後を決するといふものではないことも付言しておきたい。そのような成立を時系列的に確定することは、数々の制約により困難を伴うものである。現存文献によるのみでは自ずと限界は生じることとなるが、吉蔵と智顛または灌頂という二項対立のような図式ではなく、最低でも地論師なども視野に入れた隋唐仏教初期の潮流の中に、四種積が確立した意味を見出そうとする視座が必要であろう。

四種積に関する研究をより深化するために、まずは論点を明らかにするという目的から、本稿では筆者の価値判断は極力交えず、先行研究に指摘される問題の抽出に徹した。所論が備忘録に止まった感は否めないが、今後は以上のような先行研究の分析より浮上する諸問題を手がかりに、四種積の成立過程の解明に努めたい。

(1) 筆者は、二〇〇五年秋に提出した学位請求論文の中で「『維摩經文疏』の經文解釈法」という一節を設けて、四種釈に關連した考察を行った。ここでは、論文そのものが維摩經疏に關するものであったことから、先行研究を検証する形で『維摩經文疏』

にみられる四種釈の萌芽的解釈方法に対して考察を加えることが主であったが、新たな視点として、これらが『維摩經文疏』の構成と關係していることを示唆する『文疏』の一文に着目し、『玄疏』から『文疏』という前後關係を留意すべきことを指摘した。しかし、振り返ればその考察には不備も多く、着想のみが先走った論述に終始した憾みがあった。また、その後における学界の議論にも進展が見られた。このような経緯から、天台四種釈の成立を根本から検討し直す必要性を感じ、本稿に着手した次第である。

- (2) 本稿注(15)から(18)に挙げた諸論文の論題より明らかである。
- (3) 『法華文句』卷四上「所以四種釈者、見理由位、位立由智。智發由門、門通由觀。觀故則門通。門通故智成。智成故位立。位立故見理。見理故名爲理一也。」(大正藏三四卷五一頁下)とあるが、これは先行する部分に「先釈理一、復爲四意。一約四位、二約四智、三約四門、四約觀心。」(同上)とあるものを指している。これはその内容から、『法華經』の「開示悟入」を四一(教一・行一・人一・理一)のうちの理一により解説する際に用い

る四位(十住・十行・十迴向・十地)、四智(道慧・道種慧・一切智・一切種智)、四門(空門・有門・亦空亦有門・非空非有門)、觀心をもって四種釈というのであり、本稿で問題とする因縁釈よりはじまる「四種釈」とは異なることが知られよう。

- (4) CBETA電子仏典の検索によれば、唐代の注釈書である智雲撰『妙經文句私志記』卷二に二か所に用例が見られる。その他、天台關係で「四種釈」といった場合、本稿注3に挙げた四位より始まる四種を意図するものであった。

(5) 大正新脩大藏經テキストデータベース(SAT)の範囲では、安然撰『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』、光宗撰『溪風拾葉集』に用例が見られた。いずれも、真言の四釈などと対比する文脈において言及されるものであることが共通する。日本の用例については、これだけの調査では十分ではない。再調査の余地があることを記しておきたい。

- (6) たとえば、『織田仏教大辞典』(一九五四年)七〇七―七〇八頁では、大項目として「四釈」があり、その中の小項目で「天台四釈」として解説する。また、同様に『望月仏教大辞典』第二卷(増訂版、一九五七年)一七九六頁も、項目として「四釈」を挙げる中、解説の文中に「又四大釈例、四種消釈、四種消文とも云ふ」とする。一方、『仏教学辞典』(法藏館、一九五五年)一〇二頁では「解釈」という項目の下、語句解釈の方法の一つとして「天台の四釈例(四大釈例、四種消釈、四種消文)

とは……』といい、四種積を紹介する。同新版（一九九五年）一〇一頁も、同様である。更に、中村元『仏教語大辞典』（東京書籍、一九七五年）五一七頁には、「四積」は「四種積義の略」だとするが、その典拠として三論宗文献である『二諦義』『三論玄義』を挙げる。

- (7) 関口真大『昭和校訂天台四教儀』（山喜房佛書林、一九三五年）所収「天台大師御撰述概説（附録第二）」一三頁には、「四種積といふのは……』と説明に入る。また、天台学の綱要書として名高い福田堯顥『天台学概論』（三省堂、一九五四年）「第二節法華文句」八五頁では、「因縁、約教、本迹、観心の所謂四種消積法を以て……。蓋し四種積の一たる因縁積とは、……。』と言及する。一方、安藤俊雄『天台学―根本思想とその展開』（平楽寺書店、一九六八年）「第二節 主題と解釈法」四三〜四五頁では「四種の解釈法」「四積」といい、「四種積」の表現を用いないようである。
- (8) 例えば朝朝順『天台智顥的詮釋理論』（里仁書局…台湾、二〇〇四年）では、四種積に相当する語として、一貫して「四意消文」を用いる。『法華文句』の記述に忠実な用語ではあるが、『法華文句』全体からみれば、実際にはこれも本稿で引用した二箇所で用いられる用例にすぎないため、妥当な表現とも言い難い。

(9) 関口真大前掲『天台大師御撰述概説』一二〜一三頁。同「天

台大師教相論」（関口真大編『天台教学の研究』、大東出版社、一九七八年、初出は『印度学仏教学研究』二二卷一号、一九七三年）。特に後者は五時八教廢棄論の中で、教門の大綱として五重玄義とともに四種積が紹介される点が重要である。

(10) 佐々木憲徳『天台教学』（百華苑、一九五一年）「第二節 祖釈要文」二〇頁。

(11) 福田堯顥前掲書八五〜八六頁。

(12) 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九六一年）「第二節 法華文句の組織と四種積」三四二〜三四三頁、その他同書に散説される。

(13) 安藤俊雄前掲書四三〜四五頁。

(14) 浅井円道「解説」（国訳一切経『法華文句』、大東出版社、一九八〇年）五〇八〜五一〇頁。

(15) 平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』（春秋社、一九八五年）「第四章 文句四種積と吉蔵四種積義」。なお同章は『法華文句』の四種積と吉蔵四種積義」と題して「仏教思想の諸問題 平川彰博士古稀記念論集」（春秋社、一九八五年）に転載されているが、本稿では平井氏の専著を参照した。

(16) 多田孝文「四種積について」（詳解合編『天台大師全集 法華文句一』、中山書房仏書林、一九八五年）、同「法華文句四種積考」（『大正大学研究紀要』七二号、一九八六年）。

(17) 菅野博史「法華文句」における四種積について」（『印度学仏

- 教学研究』五四卷一号、二〇〇五年)。この他、四種釈に関連する菅野氏の見解は、「慧均『大乘四論玄義記』の三種釈義と古蔵の四種釈」(『木村清孝博士還暦記念論集 東アジアの仏教—その成立と展開—』、春秋社、二〇〇二年)、「初期中国仏教の經典注釈書について」(『村中祐生先生古稀記念論文集 大乘仏教思想の研究』、山喜房佛書林、二〇〇五年)などに示されているが、これらの内容を総合的に論じたものに「解説(上)」(レグルス文庫二五四『法華文句(一)』、第三文明社、二〇〇七年)がある。なお、「解説(上)」以外は、氏がこれまでに発表した諸論文を網羅的に収録した『南北朝・隋代の中国仏教思想研究(大蔵出版、二〇一二年)に収録されており、一部補足もあるため、本稿では基本的に初出の各論攷ではなく論文集所収のものを参照した。
- (18) 瀧英寛「三大部における『法華文句』四種釈」(『仏教文化学会紀要』一五号、二〇〇七年)。
- (19) 花野充道「智頭の法華経観と四重興廢思想」(『法華仏教研究』九号、二〇一一年)「三四種釈」二七〜四〇頁。
- (20) 藤井教公「維摩経文疏」における四悉檀の依用について(『福原隆善先生古稀記念論集 佛法僧論集』、山喜房佛書林、二〇一三年)。なお、同論文は二〇〇九年十二月に東アジア仏教研究会における発表を原稿化したもので、その発表を念頭に菅野氏は前掲書二二六頁注(7)を補筆する。
- (21) 関口真大前掲「天台大師御撰述概説」一三三頁。

天台四種釈の成立に関する基礎的考察(山口)

- (22) 安藤俊雄前掲書四四頁。この中の「完全且つ合理的な四釈」という表現は、後に平井氏から批判的に取り上げられることとなる。
- (23) 佐藤哲英前掲書七二六頁。
- (24) 平井説以後の議論の展開については、瀧英寛前掲論文において平井説の問題点及び多田・菅野両氏の考察が概観されている。
- (25) 四種釈との対応が見られるとされる『維摩経文疏』の三種釈には、このような解釈法そのものの意義付けを説く一節は設けられていない。また、四種釈に類似する解釈が用いられるとされる『金光明経文句』『請観音経疏』『仁王経疏』などにおいても、やはりこのような一節は確認されない。
- (26) 多田孝文前掲「四種釈について」一九頁。
- (27) 佐藤哲英前掲書三四三頁。
- (28) 平井俊榮前掲書二二三頁はこの点について、智雲撰『妙経文句私志記』の解釈が最も明快だとする。
- (29) 菅野博史前掲書二二六頁注(8)では、『法華文句』に因縁釈という名前が出ず、しかも四悉檀による解釈もない場合に、『法華文句記』が『法華文句』の解釈を四悉檀に対応させている例が少なからずあることに着目する。
- (30) 菅野博史前掲「解説(上)」二九八頁。
- (31) 多田孝文前掲「四種釈について」二〇頁、浅井円道前掲文五〇九頁。

- (32) 浅井円道前掲文五〇九頁。
- (33) 福田堯顥前掲書八六頁。
- (34) 福田堯顥前掲書二四八頁。坂本廣博「三種止観―特に託事観について―」（『印度学仏教学研究』三三卷二号、一九八四年）注（一）参照。
- (35) 浅井円道前掲文五一〇頁。
- (36) 佐藤哲英前掲書三四六―三四七頁。
- (37) 関口真大前掲「天台大師教相論」六五二―六五三頁。
- (38) 平井俊榮前掲書二三〇頁。智雲の積を殊更に重視するのは、因縁積に吉蔵積の参照が多いことを伏線として、四種積全体を疑うことを意図するためのように看取される。
- (39) 安藤俊雄前掲書四五頁。
- (40) 横超慧日「釈經史考」（『中国仏教の研究第三』、一九七九年、初出は『支那仏教史学』一卷一号、一九三七年）一九八―二〇〇頁。この中では、『摩訶止観』卷七下に開陳される仏法を融通する十意に着目し、その最後に位置する観心と四種積の観心積とが講經偏重の金陵の学界に「痛烈なる刺戟覚醒を喚起したに相違ない」とし、その背景に南岳慧思の実践的な『法華經』観の影響を指摘する。
- (41) 瀧英寛前掲論文九―一二頁。
- (42) 浅井円道前掲文八頁。
- (43) 平井俊榮前掲書二二九頁。ただし、これは個人的な所感とい
- うよりは、氏が参照した『望月仏教大辞典』の中に見られる「隨宜に此の中の數積を応用せしに過ぎず」（二七七七頁）との表現に影響を受けたものであろうか。
- (44) 菅野博史前掲書二二二頁。
- (45) 瀧英寛前掲論文八頁。
- (46) 『望月仏教大辞典』一七九七頁。
- (47) 瀧英寛前掲論文八頁。また花野充道前掲論文四〇頁もこの指摘を受けて、『法華經』の講説の段階から四種積が『法華經』の聴聞者たちの解釈に用いられ、修治添削を重ねて『法華文句』が完成したとの文献成立の過程を推測する。
- (48) 浅井円道前掲文五〇八頁。
- (49) 佐藤哲英前掲書では、『金光明經文句』には四種積の嚴密な区別がないものの、「因縁・約教・觀心に相当する積が見られるばかりか、両疏に共通する積義が見られるが、金光明經文句の上に法華疏の名が見られる以上、金光明疏が法華文句以後の成立であるといわねばなるまい」（四七二頁）とし、『請觀音經疏』については、約教積・觀心積・本迹積がみられ、「天台の諸著作に共通せる積風が窺われる」（五〇三頁）とする。また『仁王經疏』については、「如是積、我聞積、一時積、仏積等は法華文句の積と密接な関係をもっていることが明らかとなった。但し法華文句の如是積には因縁・約教・本迹・觀心の四積を具備しているが、仁王疏では本迹積と觀心積を欠いている」（五四五頁）と述べる。

これらの指摘は、三文献がいずれも『法華文句』などを参照して成立したことの根拠と見なされている。

(50) 菅野博士前掲書二二六頁。同様の表現は同書二二七頁にも再び用いられている。

(51) 以上の所説は菅野博士前掲書二一五～二二〇頁に詳しい。

(52) 佐藤哲英前掲書三四五及び四〇五頁。

(53) 菅野博士前掲書二二五頁。この根拠となるのは、同書二二七頁において着目する『法華文句』卷一上の「事解似因縁、義解似約教」（大正藏三四卷六頁上）の一文であろう。

(54) 菅野博士前掲書二二七～二二八頁。花野充道前掲論文三一頁の引用文の中でも、この箇所は「発迹顕本」に改められているごとくである。

(55) 菅野博士前掲書二一九頁。

(56) 花野充道前掲論文三〇～三二頁。

(57) 藤井教公前掲論文では、四悉檀が一具になり四悉檀全体の概念意義を表わす例と、それぞれの悉檀を教説に当てはめる例の二種に分類し、計六例を挙げて検討する。

(58) 菅野博士前掲書二二五～二二六頁注（7）。